

聖女の姉ですが、宰相閣下は
無能な妹より私がお好きなようですよ？

登場人物紹介

character

レイナ（十河 怜菜）

異世界に「聖女の姉」として
召喚された。非常に聡明だが
無茶を働くことが多い。
マナを切り捨てた覚悟を
迫られている

**エドヴァルド・
イデオ**

アンジス国の冷徹な宰相。
レイナのことをもう
手放す気はない。
ギーレンに軟禁されて
いたはずがレイナが
迎えに来て驚いている。

**エヴェリーナ・
ギーレン**

ギーレン国の王妃。
策略家で、国益最優先。

シーク・リック

双子の暗殺者。二人は
イオタとしてレイナの傍にいる。

イザク

「鷹の眼」の副長。
この頃苦勞性。

**クノフローク・
キスト**

王立植物園研究施設の室長。
甘い美貌を持つが、冷徹。

マナ（十河 舞菜）

レイナの妹で、異世界に
召喚された「聖女」。
ワガママで、傲慢な
彼女への報いは――



プロローグ ギーレン潜入中

「要は嫌がらせで今、私はギーレンに縛り付けられている」

エドヴァルドのそんな声が、隣で黙って会話を聞いていた私の鼓膜を揺らす。

ここはアンジェス国のイデオン公爵邸ではない。

隣国ギーレンにある王立植物園内研究施設、キスト室長の邸宅だ。

先に異世界召喚された双子の妹が、自分が薬をするために姉をも召喚させるという、馬鹿なことをしかしてくれたために入り込んだ、乙女ゲーム兼、戦略シミュレーションゲーム “蘇芳戦記” に酷似した世界。

このままいけば、異世界に来てまで妹の踏み台になってしまう。そんなことは許容出来ないと告げた私は、召喚に関わった一人である宰相エドヴァルド・イデオンに直談判し、王宮住まいの妹と距離を置く苦肉の策として、イデオン公爵邸に落ち着くことになった。

けれどゲームのシナリオ通りならば、エドヴァルドには常に断罪や暗殺の危険が付き纏う。未来のことは不透明ながら、一宿一飯の恩は返しておかねばと、そこから私は彼の死亡フラグを折るべく動き回った。

結果、ゲームのシナリオにあった国家機密漏洩による断罪劇も、エドベリ王子の暗殺も起きなかったし、その責任を負ってエドヴァルドが国外追放されることもなかった。

——フラグはすべて折れたはずだったのだ。

ところが、シナリオの強制力が働いたのだろうか。

各国を繋ぐ「転移扉」を維持する者。アンジェス国の当代は女性であり『聖女』と呼ばれる者——妹のことだけ——による、隣国ギーレンの「転移扉」視察という外交業務が急遽生じ、お目付け役としてエドヴァルドと共に行くことになった。

追放ではないにせよ、彼は国外に出ることになったのだ。

そうして旅立ったエドヴァルドと妹が、ギーレン国に着いた途端の「転移扉」の故障で、アンジェス国に戻れなくなった——などと聞くと、乾いた笑いしか出てこなかった。

故障なんて恐らくはでたらめだ。裏ではエドヴァルドと妹をギーレンに引き抜こうと、あれやこれやと策が弄されているようだ。

このまま日が経ったとて、扉の故障は絶対直らない。それは間違いない。

だから私はギーレンに向かったのだ。共にアンジェスに戻るために。

ギーレン側のヒロインだったシャルリーヌの伝手を頼り、シーカサリーの街を拠点に、エドヴァルドをギーレンに残せば王家の評判に傷が付かかねない噂を広めた。エドヴァルドを勝手に奪還すれば外交問題一直線なのだから、あくまで「ギーレン側から帰国させる」ように仕向けなければならない。

途中までは上手くいった。王とエドベリ王子の評判を落とし、正妃と第二夫人を味方にしようとしたところまでは、順調だったのだ。

ただ——

『ね、レイナ嬢？』

頭から離れないのは、ギーレン国正妃であるエヴェリーナ妃の絡みつくような声。

『エドベリ殿下と王家の評判を地の底以下に落とさないために——そちらの聖女様を、生贄として差し出して下さらないかしら？』

凄絶とも、獷猛ともとれる、大国の正妃の微笑みに私は怯んでしまった。

つまりは、今のままだと私とエドヴァルドは半永久的にアンジェスには帰れない。しかし、エヴェリーナ妃の手を借りれば堂々とギーレンから出国できる。

正面からの帰国を狙う私の意図を見透かしたうえで、彼女はそう言ったのだ。

『どうかしら、お互いに一つを差し出して、手打ちにしないこと？』

——その可否を即答出来なかった私は、エドヴァルドの目にどう映っているのだろうか。

そもそも手放す気はない。そう言うてはくれたけど。

「今回を最後に『扉の守護者』を交代させることで、貴方と聖人であるラガルサ殿の協力を得るのはどうかと、利害が一致した」

エヴェリーナ妃の案を、彼は既に吞んでいる。

そのことだけは、私にも分かった。

第一章 見放すのではなく、選ぶ

国の「転移扉」を維持できるだけの魔力を持つ者を、この世界では「扉の守護者^{ゲートキーパー}」と呼ぶ。それが女性であれば「聖女」と呼ばれ、男性であれば「聖人」と呼ばれる。ギーレン国の当代「扉の守護者^{ゲートキーパー}」は、トバル・ラガルサ。男性であり、対外的には「聖人」と呼ばれている。

今は体調を崩していて「転移扉」を稼働、維持させることが困難と言われているが……どこまでが真実か分からないのが、今の問題でもあった。

私とキスト室長の視線が交錯するのを厭うように、隣に座るエドヴァルドがキスト室長に向かって口を開いた。

「貴方にはラガルサ殿が「転移扉」を稼働させて私と彼女が帰国するまでの間、エドベリ殿下とアンジェスの聖女を眠らせておけるような薬の原材料を提供してもらいたい」

キスト室長が息を呑む。

そこに間髪を容れず、エドヴァルドが続けた。

「実際の調査は、今、ラハデ公爵邸に捕らえられている三人組と、その協力者にさせればいいだろう。薬草を横流しした罰としては相応のものになる」

「なっ……」

何かあった場合、彼らにその責を負わせられる——そう言外に伝えるエドヴァルドの言葉を聞いたキスト室長の長い睫毛が震えた。

どうやらキスト室長は、それよりも王立植物園内で薬草と情報の横流しが行われようとしていたことを、なぜアンジェス国の宰相が——という方に意識を持っていかにしているようだ。

驚愕したような視線が私へと向けられる。

……ええ、はい、洗いざらい喋られました、すみません。

そのうち使い道はあるだろうと、あんまり深く考えずにラハデ公爵邸に放り込んでおいた横流し犯三人組と、ルヴェックが洗脳して調査室に戻した青年を「使える」と言ったのも、コノヒトです。そんな内心を、キスト室長も私の表情から察してくれたみたいだった。

ちよっぴり同情混じりの視線が向けられた気がしたけれど、見なかったことにしておく。

キスト室長は咳払いと共に、エドヴァルドに向き直った。

「在庫のある睡眠薬ではなく、一からの調合をさせるのは……捕らえられた連中を、万一露見した際の楯にするためですか？」

「それもあるが、作らせたい薬が一種類ではないというのもある。睡眠薬程度なら、在庫の使用が発覚しても『間違えました』がまだ通用するのだから、それでは逆に裏を疑われるだろう」

「……睡眠薬は、あくまで他の薬を調合させるためのカムフラージュだと？」

他国の聖女^{マナ}どころか王族であるエドベリにまで薬を盛ろうという時点で、睡眠薬だろうとなんだ

ろうと「間違えて使いました」で済むはずはないと思うものの、エドヴァルドもキスト室長も、そこをまるで心配していないように見えた。

一般的には、言語道断だと怒りを露わにしてもおかしくないところだろうに、キスト室長はむしろ前のめりに、この話に関心を示しつつあるようだった。

やはり当代「扉の守護者」をその役目から解放したいとの思いが、彼の根底には流れているのかもしれない。

「そうだ。具体的には魔力を『転移扉』に注いだ後、力を最低限しか回復させない——つまり今とは真逆の効果を持つ『魔法薬』を作ってもらいたい」

「真逆の効果……ですか？」

「数少ない『扉の守護者』としての魔力の持ち主である以上、病でも老衰でもないのに死なれるのは困る。だからといって魔力が十二分に回復した後で国政に害をなす程好き放題されるのも困るし、特定の貴族の傀儡にされるのも困る。ラガルサ殿に代わる者には、ただ『転移扉』の維持だけに注力してもらいたいというのがエヴェリーナ妃の本音だそうだ」

「ただ、扉の維持だけ……」

「ああ、当代の聖人殿が傀儡だと言ったつもりはない。しかしラガルサ殿の後見という名目でキスト辺境伯家は優遇措置を受けていたのだったな。不快にさせたのなら謝罪しよう」

キスト室長は、いえ、と短く返した後で、言葉を選ぶように顔を上げた。

「我がキスト辺境伯家は、ラガルサ殿の家庭教師だったというだけで後見を名乗り、彼の実家に多

少の仕送りをするだけで大きな顔をしている。当人は機密保持のせいで王宮から一步も出られないというのに、辺境伯家当主も次期当主も、厚顔無恥も甚だしい。侍女の一人と何十年も事実婚のような生活が続けているラガルサ殿は、もうそろそろ穏やかに王宮の外で暮らさせてやるべきだと——そう考えるのは、実家への不忠とお思いになりますか？」

それは、実家とは距離を置きたい者の発言だった。

そして、ラガルサを王宮から下げる——彼を聖者の座から下ろすことに暗に賛成する物言いだ。それを察したのか、エドヴァルドも「いや」と片手を上げた。

「いざという時に実家を優先して、やはりラガルサ殿を王宮から下がらせるべきではないなどと言われると、計画が根底から覆るからな。予め尋ねさせてもらっただけだ」

「であれば、私は実家から距離を置いている身ですので、御心配なくと申し上げておきます」意外に強い口調のキスト室長に強がっている様子はない。多分本音だろう。エドヴァルドも、それ以上は聞く必要がないと判断したようで「なるほど」としか、そこは答えなかった。

場の空気が少し変化する。

お互いにすり合わせる条件は揃った、といったところか。

キスト室長は両手の指先を合わせ、エドヴァルドを見据えた。

「それで、閣下がお望みの『魔法薬』の件ですが」

「ああ」

「魔力や体力を回復させない薬と言うのは現状難しいです。奪いとる薬ならいくつかはあります

が、それには、常習性があり、命に関わる副作用も出かねません。『扉の守護者』に用いるには不適切な薬になると思われます。元々、要人の暗殺や誘拐狙いなどの不審者に使うような薬ですから、尚更」

「それは……確かにそうだな。では、難しいと？」

「……ですから、閣下とエヴェリーナ妃からの内々のご相談と仰るなら、こちらからも一つ、お願いを追加させていただいてもよろしいでしょうか」

キスト室長とエドヴァルドの視線が交錯する。

私はこの緊迫した空気に口を挟めず、黙って見守ることしかできなかった。

「……ナリスヴァーラ城に押し込められているも同然の私と、後宮に住まうご正妃殿とで聞けることであるならば、検討しよう」

やや自虐の入ったエドヴァルドの発言にも、キスト室長は揺らがない。

むしろ「ありがとうございます」と、しれっと言葉を返していた。

「なに、そう難しい話ではないと思いますよ。その話——睡眠薬は別として、こちらが指定する薬も併せて試してみてもいいということであれば、お引き受けしたい、というお話ですから」

もちろん、ラガルサ殿の身を王宮から解放すること、私の室長としての立場を保障いただくことは大前提とさせていただきますが、と付け加えられた言葉を聞いた瞬間、背筋が寒くなった。

今きくと、キスト室長の本質に近い、研究者としての狂気が一瞬滲み出ていると思う。

相手が一国の王子とアンジェス国の聖女だと察しながら、彼は条件として出された薬のみならず

新薬の実験までさせると言っているのだ。

キスト室長は笑みを湛えたままで、エドヴァルドも常の無表情を崩さない。

「……その新薬は具体的に、どういった症状を引き起こす薬なのか聞いても？」

エドヴァルドが彼の提案を斬り捨ててなかつたことで、室長はさらに口角を上げた。

「ラガルサ殿から頼まれていたんですよ。私が研究していた『魔力を回復させる魔法薬《ポーション》』が完成すれば、それに越したことはない。だがもし、それが間に合わないようであれば——『扉の守護者』として過ごした記憶だけを消す薬が欲しいと」

「記憶を……消す？ それが新薬だと？」

「ええ。魔力が枯渇して命が危うくなる——もしくは王宮から追い出される際に、『扉の守護者』としての記憶を保持していてもいいことなど何もない、とラガルサ殿は理解していましたよ。事実、その通りだ。その記憶は機密情報の塊なのですから」

そう言ってキスト室長が苦笑う。

「元々洗脳して記憶を書き換えるような魔道具があるくらいですから、記憶を消すこととて理論上そう難しい話ではないんですよ。記憶を書き換えるのではなく、消すだけです。それと、洗脳はあくまで魔道具が稼働している間の、期限付きの効果に過ぎませんが、白紙になった記憶はもはや戻しようがありません」

「それは……完成したのか？」

「ユングベリ嬢がウチに来る直前には、調合の手順書が出来上がっていましたよ。小動物での実験

も行つて、どうやら死なないうだところまではこぎつけましたが……何しろまだ人間で試せていなかったもので。消える記憶が限定的なのか、全てなのかも判然としていません」

人語を話せるもので試さないと消える記憶の範囲は分からない、とキスト室長は平然と述べた。エドヴァルドもさすがに顔を顰めている。

「その薬を試してみたいのか……」

「ええ。その結果は、今後の王家の武器として、確実に役に立ちますからね。上手くいけば都合の悪い記憶だけを消せる。失敗しても深い昏睡状態に陥る程度で死ぬことはない。次代『扉の守護者』が死ぬことさえなければいいと、先程仰いましたよね？ であれば、私からの提案は利害の一致とはなりませんか？」

王子には睡眠薬を。

聖女には記憶をなくす効果があると言われている、新薬を。

「……」

室長の言葉に茫然となったのは、エドヴァルドではなく、私だった。

——舞菜の記憶が消える？ それどころか二度と目覚めないかもしれない。

エヴェリーナ妃が、結婚式の後で寝たきりになる可能性は示唆していたけれど、それはあくまでも提案の一つだった。ただ『扉の守護者』が交代するだけだと、心の中では思っていた。

気が付かないフリをしていた。

死ぬことさえなければいい——その提案の、本質に。



言葉の出ない私の手を、隣にいたエドヴァルドがそつと握ってきた。

「いいだろう。エヴェリーナ妃には、私の方からそう伝えよう」

「エドヴァルド様……っ」

待つて、などこの場で言えるはずもなかった。

まるで決断したのは自分だと——私が決断した訳ではないとでもいうように、気付けばエドヴァルドが答えていたのだ。

隣にいるのに、その声はどこか遠くで響いているようであつた。

「薬草と調合の手順書の準備が出来たら、レイナに伝えてもらいたい。薬自体は、エヴェリーナ妃あるいはコニー夫人のどちらかがタイミングを見計らつて盛ると言つていた。ベルトルド国王が、イルヴァステイ子爵令嬢とその母親のところに通う日を狙うと」

淡々とした言葉にキスト室長が目を瞠る。

「既に……そこまで……」

「私と彼女は手を取つてギーレン国を出奔することになっている。舞台はそれなりに整えるとも。だが私と彼女がアンジェス国に戻つたからといって、ギーレンで彼女が手掛けていた案件やラガルサ殿のことを放置するつもりはない。エヴェリーナ妃主導にはなるだろうが、疎かにはしないつもりだ」

「そう……ですか……」

ならば言うことはありません、とキスト室長は微笑んだ。

動揺しているのは私だけだ。キスト室長にも、優先順位が明確にある。

彼は立ち上がると、そのままエドヴァルドに部屋への出口を指し示した。

「では植物園に参りましょうか。国内どころか周辺諸国の中でも引けを取らないと自負している研究施設を、ぜひその目でご覧下さい。私は自家の馬車で参りますから、お二人はどうぞいらした馬車で一緒に」

「ああ、そうさせてもらおう」

結局、エドヴァルドとキスト室長とのやりとりを止めることも出来なかった。

諫める？ 果たして、諫めるつもりはあつたのだろうか。心の中で問いかけても、答えは出ない。

『貴女は聖女を見放すわけじゃない。——ただ、私を選ぶだけだ』

エドヴァルドのその言葉が、ひたすらに頭の中を駆け巡る。

無言のままキスト室長の邸宅を出て、馬車に乗り込んだ。

——気付けば何故か、エドヴァルドが向かいではなく、隣に腰を下ろしていた。

「え？ あの時……」

そのまま肩から頭の後ろに手が回つて、コテン、とエドヴァルドの肩に頭をもたせかけられた。

「——言いたいことでも、ぶつきたい言葉でも、あれば聞く。何度も言うが、私がそれを厭う事はない。だからそうやって黙り込み、切れそうな程に掌を握りしめるのは止めてくれ」

「……っ」

どうやら無意識に、またやっていたらしい。手の力を緩めると、爪の痕が四つ残っている。

「……すみません」

「謝罪を聞きたい訳ではないのだが」

「す……いえ。その……自分の甘さを思い知らされたというか」

謝罪を繰り返しそうになるのを堪え、ポツリと呟く。

私の頭にあるエドヴァルドの手が、わずかに揺れた。

何も言わないままなのは、そのまま聞いてくれるということだろう。

私は言葉を紡いだ。

「まさか、何もかもを手中に収めて帰ろうと思っていた訳ではないだろう——そう、エヴェリーナ妃に言われました。それは、そうなんですよ。お互いに一つを差し出して、手打ちに——それも、そうなんですよ。……ただ」

また掌を握りかけて、慌てて解く。

「私の知らないところで、今まで通りやりたい放題の生活をして、これからも勝手にすればいいとは思っていたんですけど……意思のない、ただの『転移扉』のための『器』として生きろとまで思っていたわけじゃなかったというか……」

「……レイナ」

「で、でもっ、やっぱり妹の『補佐』はもうごめんで。だとしたら、妹の未来を察しながらも黙って帰ることになるわけで……見放すのではなく、選んだ——そう思おうとしても、なんだか自分が

楽になるために、エドヴァルド様を利用するみたいじゃないですか？ どうしても、そこがモヤモヤするというか、割り切れないというか……いやっ、甘いつて言われるのは分かってますよ？ 分かってるんですけど……っ」

掌を握ることができないと身体にも上手く力が入らない。

ただただ弱音を吐いていると、隣から盛大な溜息が聞こえた。

「……貴女は、本当に」

「エドヴァルド様？」

思わず身体を離そうとしたけど、かえって力を入れられて、身動きがとれなくなってしまう。

「甘いとか、甘くないとかの問題じゃないんだ。私は、全て受け入れると何度も言っている。私に貴女の全てを独占させてくれるのなら、それで対等だと。いくらでも利用すればいいだろう。なぜそこで躊躇をする？」

「それは……だって……」

「それとも貴女も、内心ではアロルド・オーグレーンの血を引く私を嫌悪しているのか？ 高位貴族は皆、いつかあのように人を人とも思わぬ振る舞いに及ぶかもしれないと？」

「そっ、それは違います！ 親が残念だったというだけならウチもそうでしたし！ コ、コニー夫人はとてもいい人みたいですし、血筋だけで嫌悪なんて……！」

「なら——」

「エ、エドヴァルド様が……っ」

なんとなく、こちらを向いているだろう視線は感じるものの、目を合わせる勇気がない。ただ、だからこそ、そのままエドヴァルドの言葉を遮った。

「エドヴァルド様が……やっぱり内心では、妹を見捨てる私を軽蔑するかも、って……それが……怖くて……っ」

言った瞬間、エドヴァルドの身体がわずかに揺らいだ。

やはり凶星かと、ならばもう一緒かと、そのまま内心を吐露してしまう。

「し、失望されなくなかったし……っ、だって私、多少頭が回るくらいしか取り柄が——!？」

「——本気で」

今度は私の言葉が遮られた。予想に反して、エドヴァルドが真顔でこちらを覗き込んできたのだ。すぐ目の前に、紺青色の瞳が飛び込んでくる。

「本気でそう思っていたのか？ 全てこちらの都合で巻き込んでおきながら、私が貴女を軽蔑し、貴女に失望すると——そんな風に？」

「だ……って……っ」

すっかり聖女^{いもうと}には失望して、軽蔑しているだろうに——

私の言いたいことを察したのか、エドヴァルドがはつきりと顔を歪めた。

「そもそも勝手に召喚しておきながら手を離す、私とフィルバートの方がより罪が深い。軽蔑も失望もする権利があるのは貴女であって、私ではない」

「！」

「それと、いいか？ 聖女マナを望んだのはエヴェリーナ妃、つまりはギーレン王家だ。こちらから押し付ける訳ではない」

「そ……それは……」

「詭弁ではないだろう？ 婚姻という慶事で貴女がばら撒いた記事を上書きしようとしているのだから、間違いなく、ギーレン主導の『要求』だ。エヴェリーナ妃は、聖女マナにエドベリ王子との婚姻を勧め、確実に首を縦に振らせるだろう。私や、仮に貴女が警告したとしても、かえって意地になるのも目に見えている。そもそも、あの妃に太刀打ち出来るはずもないだろうがな」

舞菜とエヴェリーナ妃。

ああ……うん、考えるまでもなく、あちらに有利なように誘導されそうだと、そこは私も納得してしまった。

「そして私は国を優先して、エヴェリーナ妃の申し入れに応じる。聖女本人も納得するだろうしな。だから言っているんだ。貴女が見放すわけではないと」

言葉を続けられなくなった私の頬に、そつとエドヴァルドの手が触れる。

「聖女が一人、国の都合で交代するだけだ。そして私は、貴女をそこに巻き込むつもりはない。貴女は私と共にギーレンを出るんだ。……出てくれるのだろうか？」

「エドヴァルド様……」

——唇が重なる寸前に馬車が着くとか、もう「お約束」ですよ、ハイ。

そして、研究をしているのか、給食担当の管理栄養士をしているのか——という昼食を、今日も王立植物園の食堂でとっていた。

けれどいつもと違う空気が、そこには満ちている。

原因は——私の隣で、宰相閣下が物珍しげに料理を眺めていることです。ええ、間違いない。キスト室長から、食堂の厨房料理人さん達に話は通しておいてもらったし、まさかフルコースにも出来ないだろうと、室長も言っただけ。

ファルコのスープとか私のオムレツとかも普通に食べていたくらい、こだわりが少ない人だっというのも分かっていただけ。

それにしたって、エドヴァルドの生粋の高位貴族オーラと、植物園食堂というこの風景との馴染まなさは如何いかんともしがたいわけで。

半径一メートルくらいは、結界でも張られているのかというくらい、研究員の皆様が遠巻きだ。

「ユングベリ嬢の婚約者が敵情視察に来たらしい」

「え、連れ戻されんのか!？」

——遠巻きになったところで、全然ヒソヒソ話になってないのよ、そこ！

室長と私と、イザクとシーグは逃れようもないだけに、尚更空気が重い。

「そういえば屋敷でも、緑色の野菜が身体に良いとかどうとか言っていたと、聞いた気がする

な……その延長か」

エドヴァルドだけが通常通りの声と顔で聞いている。

私も、この空気を変えることは諦めて頷かざるを得なかった。

「そうですね。未病医学とも予防医学とも言っていましたけど。病気を『治す』んじゃなくて、病気に『しない』ことを究極の目標にしている研究分野です」

「確かにそれは斬新だな」

私とエドヴァルドが、そんな風に公爵邸の朝食よろしく話をしていると、キスト室長がおずおずと会話に入ってきた。

「その……閣下、出来れば彼女には、商会の仕事を続けてもらいたいのですが……？」

キスト室長の言葉に、なんの話だと目を剥むいたのは、多分私だけ。

室長、王立植物園の研究施設は、魔法マジック薬を作る環境にあるのだとエドヴァルドに見てもらっために呼んだんじゃないんですか……？ それがなぜ、ユングベリ商会の仕事の話に。

「閣下の家格を考えれば、まさか商会の入婿は不可能でしょうし。かといって、彼女を貴族社会に押し込めてしまうのはあまりにも惜しい」

しかも半径一メートルほどの外側で、頷く人数。

……なんで？

「まあ、植物園に来た経緯や、だいたい薄まったにしろその痕を見たら、商会の跡取り娘を大貴族の婚約者が迎えに来たようにしか見えないからな。それで、結婚を機に仕事を辞めさせようとしてい

る——と」

怪訝そうな私を見かねたのか、小声でそう教えてくれたのはイザクだ。シーグはその隣で、やっぱり黙って頷いている。

「痕？ なんの？」

トントンと自分の首筋を叩いて教えてくれるイザクは、親切というよりは——多分皮肉や厭味でやっている。

この前、天然仕様の首席研究員——リュライネンさんに、盛大に暴露された事を思い出して、私は思わずあらぬ方向に視線を逸らした。

なんてこと。やたら空気が生温かいと思ったら、それが理由だったのか。

室長以外、まさか隣国の宰相閣下がここにいるとは思っていないにせよ、身分差のある婚約だとは周りも思っているのだ。

（うん。私が「聖女の姉」だと、アンジェス国の人間だと思われなかったためには、この空気は壊しちゃいけないのよ）

無事に帰国するためには、羞恥心は後回しだと、私は自分に言い聞かせた。

ここはキスト室長に乗っかるべきだろうか。

そんな明後日の方向に葛藤している私をよそに、エドヴァルドの一言が、不意に周囲の気温を低下させた。

「……随分と、植^く物園で高く買われているようだ」

イザクが肘を突いてきたということは、エドヴァルドを押さえろということなのかもしれない。

長年仕えるイザクの方が場を取められるのでは——そう主張しようと思ったら、今度はシーグに肘で小突かれた。なんで。

そんなことをしている間にも、キスト室長が畳みかけるように笑顔で話を続けている。

「予防医学の話もそうですが、植物園を一般市民にもっと親しんで貰うためにと考えた無料配布の紙面も、シーカサリーの街ごと巻き込みましたからね。日頃から変人の巣窟のように遠巻きに眺められていた自分たちが今や、街を歩けば普通に挨拶をされる——と、中には休日明けに、感激して食堂で語る研究員もいるようです。それも彼女のおかげです」

逆に今までどんな様子だったんだと、思わず内心でつつこんでしまったけど、さすがに今、口には出せない。

「なんでも正妃エヴェリーナ様のご生家に近い領地にしかない果物を使った、貴重な茶葉に関しても、競争入札にまでこぎつけているとか。これが取り扱えるようになれば、商会はベクレル伯爵夫人の実家領地周辺どころか、ギーレン国全土に顔が利くようになる。もちろん、この植物園との定期的な取引に関しても、商会の規模が変われば当然可能になる。全てユングベリ嬢の手腕だ。ここでも手を引いてしまうのはもったいなくて、とても見ていられないのですよ」

「……………」

そして空気が更に冷えました。

最終目的のためとは言え、そこまでする必要はあったか？——と、エドヴァルドの心の声が聞

こえる気がします。

なりゆきです！

結果的にそうなっただけです！

……目で訴えてみたけど、もしかしたら逆効果だったかもしれない。

エドヴァルドが一瞬こちらを見た後、淡々とした声で告げた。

「……彼女の才能に関しては否定しない。だが、何度言っても、何を言っても、結局無茶をする。首根っこを掴んで連れて帰りたくなってしまうのは、間違っている？」

その声に思わず視線を逸らしたのは私だけで、どこからか「あー……」という声が聞こえた気がした。

「なんだかんだと言って、イザク達もレイナには甘い。ほぼ抑止になっていないからな」

イザクもバツが悪そうに明後日の方向を向いている。

キスト室長だけがそれに抗うように、言葉を紡ぐ。

「貴族社会がどうのという話ではないと仰るか」

「かつて近い身内で、望まぬ事を強要されて、心を壊した者がいた。私はレイナをその二の舞にするつもりはない。つもりはないのだが――」

「あまりに危なっかしすぎる、と」

「私や室長ほど貴族社会の闇を知らぬが故、尚更に」

エドヴァルドの言葉に、辺境伯家次男であるキスト室長は、何かしら思うところがあるよう

だった。

「ふむ……閣下の言いたいことは、なんとなくですが理解出来ました。商會を潰すつもりがないと仰るのであれば、彼女がここにいる間、あるいは後々もここを訪れる限りは、なるべくフォローをするようにはします。そうであれば、今しばらく商會の仕事を手掛けさせてもらえますか？」

「……同時に虫除けも嚴重に行ってもらえるのであれば、検討しよう」

「……なるほど。意外に閣下は狭量だと周知すればよろしいのでしょうか」

「なんとも」

冷やかな空気の中で含みのある会話が交わされる。

ええっと、今で私は『婚約者の許可』を得て、無事に植物園で研究を続けられるようになった——という建前が整った、ということではないでしょうか？

答えは返らなかったけれど、その代わりに、話は終わったとばかりに空になった食事のトレイを持ったキスト室長が立ち上がった。

エドヴァルドが目を見開く。

しかし、それはセルフ返却の概念が全くないせいで、食器を自ら運ぶ姿に驚いたようだった。

「さて。植物園と、研究施設。閣下にはそれらを一通り見ていただいて、最後に私個人の研究室兼収穫室にご案内しよう。例の新薬の手順書の件も、一緒に薬草の在庫確認をされてはいいかがか。私慌てて手を伸ばすと、それを察したイザクが素早く自分の分とエドヴァルドの分をすくい上

げる。

「ありがと、イザク」

「お嬢様はご自分で」

「ワカリマシタ」

そんな軽口を交わしながら食堂を出ると、キスト室長が興味深そうに私たちを振り返った。

「時折、口調が気安いと思っていたら……あれか、イザクはもしかして商会の従業員じゃなく、閣下が貴女を心配して付けた部下なのか？」

「本来は……まあ、そういうことですね。調査担当なのは間違っていないですけど」

「イザクの腕が確かなのは見ていれば分かる。しかしまあ、閣下が心配性なのか、貴女にそれだけ心配をかけている前科があるのか——」

苦笑交じりのキスト室長に、イザクが「あえて両方」などと大真面目に答えているのはちよつと心外だ。

「……イザク、やつぱ一緒に氷漬けみたいだよ」

私が否定をするより先に、背中が寒い。

「……俺としたことが。日頃の愚痴で余計なことを」

シーグはずつと無言だけれど、俯いた肩がちよつと揺れている。

キスト室長はそれを見て「なるほど両方か」と、一人納得していた。

「確かに、薬草の横流しの件なんかは特に、本来なら自警団案件だしな。ああいった時に大人しく

しているよう説得する誰かが必要なら、分かりやすい例えではあるな。あれは確かに、イザクがいれば良かった。最後押し負けたという点でも、閣下の指摘は正しいしな」

ノーと言えない○○人ならぬ『鷹の眼』。

口にしたら怒られそうなので、不本意そうなイザクを横目に、私はだんまりを決め込む。

「しかしユングベリ嬢だけでなくイザクも、リュライネンとの共同研究をどうするか考えなくてはならないだろうな。本来であれば、閣下あるいはユングベリ嬢と行動を共にするところだろうが、研究の進捗状況を見ると、リュライネンも君にいてほしいんじゃないかと思うんだが……」

「室長……」

歩きながら、イザクがなんとも言えない表情を見せる。

そうだ。もともとは怪しまれずにギーレンに潜入するために、シャルリーヌを通してベクレル伯爵の手を借りて、この植物園に籍を置かせてもらった。エドヴァルドの帰国のメドが立つまでの、仮の仕事、研究であるはず。

研究の裏で、いつでも帰国できるようにしておく必要もあるのだ。

それでも、究極の毒消し、いわゆる^{エリクサー}霊薬が完成するかもしれないとあっては、それを投げ出して帰るとは口にできない——というか、したくないのがイザクの本音だろう。

どうすべきか……いや、まだ少し、悩む猶予はあるはずだ。

私が悩む時間も、きつと——と考えて、笑顔を作る。

「ああ、完成したら王家にレシピを献上するかしないか含めて、エドヴァルド様に相談しないとい

けなかったですよね」

まずは、今できることを。

エドヴァルドもここにいるのだから、後でキスト室長の研究室で一緒に相談するのもアリだろう。「あ、そういえばイザク、イザクの元のレシピで予備作っただけ？ 一応後で馬車留めにいるナシオにでも預けられる？」

恐らくは、そう遠くないうちに帰れる。その手筈は整ってきているものの、念のためを考えておくのも大切だ。

イザクもそれはそうだと思ったのか「大丈夫だ、後で預ける」と頷きながら答えた。

キスト室長の研究室に着くと、新薬と睡眠薬用の薬草の在庫を確認してくるとキスト室長が言っただけ、私とエドヴァルド、イザクとシーグが残る形になった。

「エドヴァルド様、そういえばナシオに預けておいた^{エリクサー}霊薬もどきというか、解毒薬というかの効果であつたんでしょうか？」

「……そもそも」

あれ？ 答えるエドヴァルドの声は不機嫌なままだ。

「フィットとナシオは王宮の護衛騎士に紛れているし、鞆には害獣用の罠と非常食が詰め込まれている。……^{エリクサー}霊薬もどきかどうのという以前の話じゃないのか」

「あつ、そうですね！ 罠の威力も聞いておかなきゃでした」

「……わざとならいい度胸だ、レイナ。そういう話をしているんじゃないと、まさか分からないと

は言わないだろうな」

「ええつとですね……念には念を入れただけで……」

「念」

ここにきて、どうやら不機嫌の原因は私らしいとさすがに悟る。

「や、役に立ちませんでした？ ただのお荷物になったんなら申し訳なかったです……」

「生憎、非常食以外は非常に役に立った。役に立ちすぎて、^{エリクサー}霊薬もどきに関してはどこかの王立植物園に目を付けられるし、害獣用の罠に関しては、アンジェスの王宮護衛騎士たちが興味津々だ。戻ったら確実に管理部の連中に話が洩れるだろう。事前に一言説明さえあれば、どれもこれも話がそこまで大きくならなかったんだが」

事後承諾みたいにアレコレ裏から手を回した点に関しては、私よりも、むしろどこぞのサイコパス陛下を追究してもらいたい。それはもう切実に。

口を開くと余計な事まで言いそうなので、視線で訴えてみたところ、多少？ ナニかは伝わったみたいだった。

「……フィルバートは、予定外のギールン滞在を謹慎期間に含めようとしているみたいだが、絶対に阻止してやる。戻ってから、きっちり一ヶ月休んでやるからな」

わあ……もはや謹慎が余暇扱いになってます。

謹慎って、意味なんだっけ。

聞かなかったコトにしていいいでしょうか。

顔を痙攣^{ひきこ}らせた私に気付いたエドヴァルドは軽く咳払いをして、脱線しかけた話題を元に戻した。「害獣用の罠に関しては、侍女が廊下の端に吹き飛ばされるくらいの効果があった。全く新しい魔道具じゃなく、今あるものの応用だから、管理部以外の一般の護衛騎士達への訴求も早かった」

「……それ、侍女さんは無事だったんでしょか」

「知らん。死んだとは聞いていないが。あまり威力が弱いのも意味をなさないだろうから、いいんじゃないのか」

「そ、そうですか……」

この辺りのシビアさは、さすが一国の宰相というか、サイコパス陛下の幼なじみというべきか。「薬に関しては、これみよがしに目の前で料理に振りかけたら国王も王子も顔を痙攣^{ひきこ}らせていた。何かは混ぜられていたのだろうが、特に毒らしい効果はなかった。つまり、ある程度の効力があつたはずだが、まさか何を混入したなどとは聞けん。薬がたまたま効いたのか、本当に毒消しとして万能なのかまでは判断が出来ないな」

顎を指先でなぞったエドヴァルドに、後ろからイザクが割って入る。

「なるほど、何かしら効力があつたという事が分かっただけでも一歩前進です。お館様、出来ればギーレンに残つてでも、薬が完成するまで続けさせていたいただきたいのですが……」

リュライネンのおかげで、先が見えて来ていると、イザクが言った。

「ただ基本的に植物園の研究結果は王家に献上をするそうなので、アンジェスとギーレンで権利を共有することが可能なのかも、指示を頂きたく……」

真摯なイザクの声色に思うところがあつたのか、エドヴァルドは少し考える仕種を見せた。

「画期的な薬にはなるだろうが、公爵家での独占は難しいか」

「はい。しかも同効果の薬についてはほぼ同じ時期に取り掛かり始めていたようなので、秘匿したとしても、遅かれ早かれ開発はされていたかと」

「だつたら、互いの手元に調合の手順書があると、予め分かっている方が双方にとつて都合がいいだろうな。合意の上で、原材料の一部を変えるのが一番いいだろう。それは出来そうなのか？」

「恐らくは。ここの首席研究員とも、今、その方向で詰めております」

「分かった。なら、そのまま進めろ。残つた後のことは、こちらの帰国日が定まつたところで再度指示する」

「あ、ありがとうございます……」

イザクが感激した様子で頭を下げたちょうどそこへ、キスト室長が戻つて来た。

「うん、どうした？」

「あ、室長。イザクが薬の完成まで残ることになりました。あと、一部原材料を変える形で、ギーレン王家献上分との差別化を図ろうかと」

私が前半の話をさくつと無視してこの場をまとめたことに気が付かないまま、「イザクがこのままリュライネンと共同研究をする」というところにしっかりと反応して、キスト室長は喜色を浮かべた。

「そうか！ いや、確かにユングベリ商会にも商会としての事情があるだろうからな。たとえ一種

類でも原材料を差し替えて『別物』に出来るなら、そこが落とし所だろう」

キスト室長が机の上に羊皮紙の束と薬草を数種類並べていく。

「さて、調査の手順書は渡せるが、やはり新薬の方の材料が少し足りなかった。ただどれも近隣領地に言えばすぐ揃うだろうから、一日二日あれば用意は可能だと思う」

「それなら、エヴェリーナ妃とラハデ公爵と日時を調整している間に揃いそうだな」

そう返したエドヴァルドの視線が、じっと私へと向けられた。

「レイナ。私は私でエヴェリーナ妃と連絡を取るが……貴女もラハデ公爵経由で連絡を取れるか？」

いいな？ と、覚悟の程を改めて聞かれた気がした。

一瞬の視線の交錯の後で、私は大きく息を吐き出した。

ラハデ公爵に連絡をするということは、エヴェリーナ妃の提案を受け入れることと同義だ。

後悔しないためには「私がどうしたい」のかを考えて、決めなくちゃいけない。

聖女を、舞臺をどうするのかと思いが、判断をしてはいけないのだ。

「そ……うですね、はい、タイミングを見て連絡します。大丈夫です」

大丈夫にしくちゃいけない。

——エドヴァルドとギーレンを出るのであれば、このままの状態を続けることはできない。

(どうしたい？ どうすべき？)

決断の瞬間は、容赦なく迫ってきていた。

表向き、エドヴァルドは「先日の王宮での顔合わせでキスト室長と意気投合、エドベリ王子と聖

女マナの視察には同行出来ないと聞いた時点で、室長が個人的に招待した」名目で、植物園を訪問したことになる。

「それだと『裏』の人間に邸宅に来たことが嗅ぎ付けられても通用するから」

意気投合とは便利な言葉だ。

そう微笑むキスト室長が、ちよつと黒い。

たとえ研究員達の間で「ユングベリ嬢の婚約者」と認識されていても、紙面の存在がある以上は後になっても「アレ、宰相閣下だったのか！ なるほど紙面はやっぱり真実だった！」としかならないから、問題ないと。

もはや国王とエドベリ王子よりも、エヴェリーナ妃とコニー夫人との協力を選んだことをキスト室長も隠していない。

彼はどうかやら実家である辺境伯家との折り合いが相当悪いらしい。

当代「グレートキーパー扉の守護者」であるラガルサさんの後見職から実家を引き剥がすために、新たに「グレートキーパー扉の守護者」となる者の後見先についてはオススメがあるから、エヴェリーナ妃に薦めてみてくれとまで言ってきた。

「アベラルド公爵家なら、キスト辺境伯家とは不仲だし、ラハデ公爵家とは勢力的にもほぼ拮抗している。違いは令嬢が王家に輿入れしたか、しなかったかの違いだけと言ってもいいくらいだ。後々問題を引き起こしそうな強欲な縁者を持たず、見るからに御しやすいような聖女の後見ともなれば、喜んで引き受けるはずだ」

そう笑顔を向けてくる。見るからに御しやすそう、ときた。
そして嫡男とは顔見知りらしい。

「かつ、次期公爵となるディエスには、ラハデ公爵家と正面切つて事を構える意思はない。充分手は組める。キスト辺境伯家を抑えることができて、ラハデ公爵家だけを優遇していると取られないためにもちょうどいいと説けば、陛下も殿下も、聖女をアベラルド公爵家に縁付けて王家の一員とする話に折れざるを得ないだろう」

エヴェリーナ妃も賛成するはずだと、キスト室長は言った。

アンジェスよりも国の規模が大きいただけあって、貴族家ごとの力関係がさらに面倒なようだ。

というかキスト室長がよく貴族同士の関係を理解している。

本人の希望が多分に反映されているにせよ、辺境伯家と距離を置いていることが凄くもったいないんじゃないだろうか——辺境伯家の将来にとつては。

「……いいのか、それで。実家のことだろう」

多分エドヴァルドも同じことを思ったんだろうけど、キスト室長の方は「私は自分が静かに研究に没頭出来る環境を整えたいんですよ。実家のことなど二の次です」といい笑顔で言い切った。

まあ、当人がいいと言うならいいんだろう。基本、他国のお家の話だし——と、多分私とエドヴァルドは、同じところで納得したような気がした。

私に一瞬視線を向けてから、エドヴァルドが頷く。

「分かった。その後見の件は、折を見て私の方からエヴェリーナ妃に直接話をしよう。レイナから

ラハデ公爵経由となると、ラハデ公爵家に不穏な意思があると取られかねないだろうからな」

「私も、用なく調査室以外に出入り出来ませんし……といいますが、エヴェリーナ妃とお会いするとなったら、後で周りから何を言われるか分かったものではありませんから、そこはお願いするしかないですよ。申し訳ない」

——最後キスト室長がそう言った形で、いったん王立植物園の「視察」は終了した。

「……次こそは、帰りたいものだな」

去り際にそう、エドヴァルドに耳打ちされた私は、不意を突かれたせい、顔が赤らんで見えていたらしい。結果として、紙面の話に信憑性がさらに増したと、後にイザクから聞かされることになった。

【ギーレン王宮 Side】コニーの幕引

アンジェス国の子爵家に過ぎないはずのクリストフェル家に、隣国ギーレンの、それも国王陛下に娘が見初められたなどという知らせのあった当初は、家族以下、周囲が上を下への大騒ぎだった。そもそも、バリエンダール国の珍しい香辛料とその使用手順書と、クリストフェル家を通して仕入れた料理を国王陛下がいたくお気に召した。そこで大きな式典があった際に、褒賞を兼ねてギーレンに招かれたことがきっかけだった。

ギーレン王家が既に国内の公爵家から正妃を迎え入れていたとはいえ、側室、それも第二夫人となれるだけでも子爵家からすれば僥倖だと周囲は見做していた。

当時の私は思い人もおらず、国王自身、頭髮が寂しい訳でも腹囲が目立つ訳でもなかったで、家のためになるならば……と、受け身ながらも申し入れを受けたのだ。

——まさかそのことが、妹の身に悲劇をもたらすなどとは思いません。

正妃であるエヴェリーナ様は、貴婦人の鑑かたみのような女性だった。

側室となった私を疎んじてもおかしくはないのに、私を氣遣い、妹を氣遣い、夫である国王陛下と共に、妹ベアトリスの嫁ぎ先まで必死になって探して下さった。

王家の醜聞をこれ以上広めたくないというのが本音だったとしても、私達姉妹に寄り添って下さったのは紛れもない事実であり、彼女は間違いなくあの頃の私達の希望だった。

妹が嫁ぎ先で心を壊して鬱ふさくなってしまったことも、男の子が一人遺されたことも、包み隠さずエヴェリーナ様は教えて下さった。

これから死ぬまで会うことがなかったとしても、その子が困窮して訪ねて来るようなことがあれば、手を貸してあげられるだけの力をつけておくべきだと。

殺しても殺し足りない程の男の息子であると同時に、たった一人の妹の息子であることもまた確かなのだからと。

今思えばエヴェリーナ様は、私まで心を壊してしまうことを危惧されたのだろう。

既にパトリック様という王子の母となっていちゃったとはいえ、当代直系の血がただ一人と

いうところに危機感をお持ちだったのだと思う。

何度もお茶会に誘ってくださったのは色々なお話をし、私は少しずつ妹を失った痛手から立ち直り、エドベリを授かった。

王宮内部は魑魅魍魎ちみもうろうろうの巢窟、とエヴェリーナ様はよく口になさる。

クリストフェル家という狭い世界しか知らなかった私は、当初その意味を全く理解出来ていなかった。

それでも月日が経ち、エヴェリーナ様の手の届かないところでパトリック様が事実上失脚されて、エドベリが私の言葉にだんだん耳を貸さなくなってくると、考え方や言動が甘かった私でさえ、その意味が理解出来るようになってしまった。

国内の当代「扉ゲートキーパーの守護者」の力が弱ってきていることは、確かに国にとって最大の懸案事項ではある。

だからといって、シャルリー嬢と「扉ゲートキーパーの守護者」の一举両得を狙ってアンジェス国に向かうなんて、どう考えても身の丈に合っていない。

「くっ……王族の地位を用意して、庶子とはいえ当代国王の娘まで付けてやるというのに、何が不満だ!? その上継承権放棄だなどと、馬鹿げている……っ」

アンジェス国から「扉ゲートキーパーの守護者」とお目付け役としての宰相を招いて戻ってきたエドベリが、そう言っただけで執務室の机を蹴飛ばしていたらしいとお付きの侍女から聞いた時には、私は驚くというよりは、むしろ嬉しくなってしまったのだ。

エドベリは分かっている。

家庭教師なりベルトルド陛下なりから、オーグレーン家とクリストフェル家にまつわる現王家最大の醜聞については聞いているはずだが、心の底からは理解出来ていなかったのだろう。

既に断絶したからといって、クリストフェル家の者がアロルド・オーグレーンを許す日は来ない。そんな家を再興するなど、そもそも受け入れられるはずがないのだということ。

エドヴァルドという名のベアトリスの息子は、オーグレーンの血を否定した。そのことがとにかく嬉しかった。

そしてアンジェス国の「扉の守護者」と宰相の歓迎を兼ねた内輪の晩餐会で、私は初めてベアトリスが遺した子——今やアンジェス国の宰相であるエドヴァルド・イデオン公爵と顔を合わせた。

聞けばベアトリスを受け入れてくれた先代イデオン公爵も、エドヴァルドが十歳になるかならないかの頃に既に他界しており、エドヴァルドがイデオン公爵家を継いでから、もう二十年近くにもなるらしい。

——紺青色の髪と瞳。

私と同じ。

クリストフェル家の特徴を受け継いだその容姿に、私は涙が出そうになった。

妹は、心までは汚されなかったのだと、そう信じたかった。

そしてその数日後、私はエヴェリーナ様からお茶会の招待状を手渡された。

王宮内ではなく、ご実家のラハデ公爵家の王都邸宅で開くのだと言う。

「ここ数日、面白い噂が流れているをご存じ？ それもあって、王宮じゃない方がいいと判断しましたのよ」

そう言って嫣然と微笑むエヴェリーナ様が、後宮の一室でとある印刷紙面を見せて下さった。物語調で書かれてはいるものの、明らかにギーレン王家の人間を貶める内容だ。

「これ……不敬罪では……？」

「残念ながら微妙に名前が違っているでしょう？ 今の王家の話と受け取ってしまうように誘導がなされているのだけれど、書いた方は『自意識過剰』とでも『心当たりでも？』とでも突っぱねることが出来るのよね。その上、無料配布だそうよ？ お金が目的でばら撒いた訳じゃないという主張まで出来てしまう優れモノ」

「な……」

絶句する私とは裏腹に、エヴェリーナ様は本気で感心しているようだった。

「しかもこれは、あくまでその次に発行する、シーカサリーの街と、王立植物園の支援紙面のための見本で、そちらが完成した暁には後ろ楯になつてほしい——なんて、サイアスにねじ込んだお嬢さんがいてね？ そのお嬢さん、シャルリーヌのお友達で、イデオン宰相ともとても親しいそうなの。あまりに興味深いから私、イデオン宰相とは別に、お茶会にお招きしましたのよ。コニー様も、ぜひそちらもご一緒下さいますかしら？」

「え……ええ、もちろんですわ」

シャルリーヌ・ベクレル伯爵令嬢も、「頼りないパトリックを裏から掌で転がせる逸材」とエ

ヴェリーナ様の称賛を受けるだけの素地のあるご令嬢だった。

エドベリが彼女を欲して第一王子を蹴落とす裏工作に勤しんだと聞いた時には、エヴェリーナ様への申し訳なさでいっぱいになったのだが、彼女は「息子がそまでの器だったというだけよ。古参の大臣達を出し抜いただけ大したものだわ」と、あっさりエドベリの支持に回った。優先すべきは「王」でも「王子」でもなく「王家」——との姿勢にブレがない。

私にはとても出来ないことだ。

そんなエヴェリーナ様が認めていた、シャルリーヌ嬢の友人。

さらにどうやら晩餐の席でエドヴァルドが口にした「公爵邸に咲き誇る花」ではないかと、エヴェリーナ様が仄めかすご令嬢。

同じ日に招くのに、わざわざ時間をずらす理由が私には分からなかったが、そこはエヴェリーナ様にお任せするしかないと、私はそのまま当日を迎えることになった。

どうやら、私がエヴェリーナ様に見せてもらった紙面が、エドベリが抱えている「裏」の者達の誰かから、エドベリにも届けられたらしい。

名前のことを気にしなければ、貴婦人が集まるサロンや年頃のご令嬢が集まる茶会などで、話題になるのは必定と思われるような、よく出来た恋愛小説の紹介記事だ。

普通ならばそんなものはエドベリどころか、陛下の目にすら届かない。

ただ「純愛を貫く二人」を邪魔する悪役扱いでリドベリ王子やバルトルド国王などという登場人物が出てくれば、それは「裏」の彼らだって、ご注進に向かうだろう。

ただし彼らがこの話を知った頃には、紙面自体は既に高位貴族の貴婦人やご令嬢の間で広がり、エドベリが話を揉み消そうと動いたところで、どこも揺さぶれない状況が出来上がりつつあった。

エヴェリーナ様が言った通りの状況なのだ。

そんなある日。

「よく出来ているわ。それはもうビックリするくらい。たとえ一字名前が違っても主張しても、これで王家がイデオン宰相とイルヴァステイ子爵令嬢との婚姻を強要すれば、物語と重ね合わせた人々から、間違いなく王家への不満が出る。知ったことかと切り捨ててしまうのは簡単だけれど、求心力の低下は、長い目で見たら確実に為にならない。困ったわね……」

後宮の一室で、エヴェリーナ様はそう言って溜息を溢された。

さすがに私も、自業自得的な側面が強いとはいえ、エドベリと陛下の評判が地の底に落ちたり、イルヴァステイ子爵令嬢とその母親が身の丈に合わない権力を持つて周囲に担ぎ上げられた結果、パトリック様の時のようにエドベリの周囲を脅かしたりするようでは困る——とは思っている。

その気持ちは、しっかりとエヴェリーナ様に見透かされていた。

「お茶会で、イデオン宰相とこの商会のお嬢様とは『落としどころ』を話し合わなくてはなりませんわね」

エヴェリーナ様は、私の一歩も二歩も先を行く方だ。

「イデオン宰相とは、最後、少しお二人で話せる時間をお取りしますわね？ 泣いて互いの無事を確かめ合うも良し、互いに罵り合うも良しですわ。何事にもけじめは必要でしょう？」

——と、エヴェリーナ様は言い、私はようやくそこで、なぜ彼女がお茶会の時間を分けたのかを理解したのだ。

お茶会当日。

エヴェリーナ様がエドヴァルドに「アンジェス国の聖女をギーレンに渡してほしい」と申し出た事に私は驚いた。

それもエドベリのように、単に現「扉の守護者」であるラガルサ殿の交代要員、それを自分で見つけてきた功績を誇りたいからという訳ではない。

紙面によって落ちた王家の評判を回復するために、婚姻というおめでたい記事で話題を上書きすると、明確な意図をエドヴァルドに示したのだ。

そして私から見ても、王妃の器ではないと思われるアンジェス国の聖女には、結婚式後は表舞台から退かせることで一時の婚姻をエドベリに納得させる、とも。

事実上の王妃は、アンジェス国にとって都合が良く、シャルリーヌ嬢を諦めざるを得ないようなご令嬢を国内外問わず推挙してくれて構わない——とまで、エヴェリーナ様は仰った。

エドヴァルドの目が「実の息子についてここまで言われていいのか」と私に向けられたけれど、正直、パトリック様の二の舞にならないよう、王位継承者として尊重をして下さるエヴェリーナ様の案以上の代案を示せないのだから、当然だと納得さえしている。

昼食の用意をさせると、エヴェリーナ様とラハデ公爵は退室した。

そして、エドヴァルドと二人きりになると、私の甥である彼はポツリと「自分にしろ使用人にして、実母が公爵邸に居たことを覚えている人間がほばいない」と呟いた。

ベアトリスはエドヴァルドを産んで幾許もしないうちに亡くなったのだと。

ではやはり、私を知るベアトリスの最後の姿は、魂が抜けたかのように、笑うことも忘れたまま、イデオン公爵家へと旅立ったあの時のまま——

落胆しかけた私を見かねたのか、エドヴァルドは私を見て「ただ」と言葉付け足した。

「この髪と瞳が、ギーレン王家の象徴である『赤』ではなく、クリストフェル家の『青』であったこと——それこそが、母が私を守ってくれた証だ」

「私にあるのはクリストフェルの血だけだ」

——と。

（ああ……!!）

私は溢れる涙を止めることが出来なかった。

クリストフェル家の者が、アロルド・オーグレーンを許す日は永遠に来ない。

その「暗黙の掟」は、ちゃんと受け継がれていたのだ。

「伯母上」

オーグレーン家の継承権放棄と、アンジェス国への帰国を望む甥からの、最初で最後になるかもしれない呼びかけに、私は視線を上げる。

午後来る商会のお嬢さんは、どうやら私の義理の姪になるかもしれないらしい。

「まだ確約はもらえていないので、後押しをして下さると尚嬉しいが」

公爵の地位と宰相の地位を持つ甥は、世間的には「優良物件」であるはずだが、そんな甥の求めに即答しないというのは珍しい。

それとも、商会の仕事にそれだけやりがいを感じているお嬢さんということなのだろうか。

今日この場だけでも、ヘアトリスの代理のつもりで、午後、そのお嬢さんに会ってみようと思った。

「……納得のいく話し合いは出来まして？」

ダイニングで待っていて下さったエヴェリーナ様の気遣いが温かい。

「……はい。それと午後来るお嬢さんに関して、あの紙面の宣伝のためではなく、エドヴァルド甥が本気で望んでいる風に見受けられました」

「あら。それは楽しみね」

ただ、その後現れた黒髪の少女が、ギーレン国内でもおいそれとは見ない鮮やかな紺青色の石を使ったネックレスを身に纏ったうえ、首周りに少なくとも二箇所は「自分の物」だと主張する痕を付けて現れるに至っては、たとえ昨日まで会ったことがなかった甥でも「本当にウチの甥が失礼を……！」と、頭を押さえつけて詫言せたい気持ちになった。

——だって、アンジェス国からギーレン国に来て、レイナ嬢がエドヴァルドと会ったのは、この邸宅のガゼボに案内されてからだけなのに！

隣のエヴェリーナ様も、珍しく啞然とした表情になっている。

「サイアス、貴方、気を利かせすぎたのではなくて？」

私もそう思います、エヴェリーナ様。

最後までしなければいいというものではありません。

なんといっても、他所様の邸宅です。

まさかここまで執着しているとは思いませんでした。ただ少女自身は、好意に気付いてはいても、その執着にはまだ気が付いていない——そんな気がした。

甥の「後押しが欲しい」とは、そういうことなのかもしれない。

「……最近、とても貴女によく似た子を見た記憶があるわ」

エヴェリーナ様の言葉にハッと我に返って少女を見れば、確かに私にもそうだと思えた。

髪の色も、髪型も、何より間延びせず、理路整然とした話し方がまるで違う。

それでも、どこかアンジェス国の聖女と似た雰囲気を感じる。

そしてそんな少女——レイナ嬢の目は、驚いたように私に向けられていた。

ああ……！ と、私は納得した。

彼女はエドヴァルドから、全て聞かされていると。

やはり甥は、本気で彼女を望んでいるのだ。

（——オーゲレーンではなく、クリストフェルの血が繋がるのだと、どうか祝福してはもらえまいか）

私がエドヴァルドの言葉を反芻しているすぐ傍で、ラハデ公爵はエヴェリーナ様とレイナ嬢との

やり取りを、半ば茫然と見守っていた。

「姉上と対等に会話が出来るご令嬢は初めてかもしれない。シャルリーヌは一度の説明で理解出来る娘だった。それだけでも稀有だったが、彼女は会話の中で、自分で姉上の考えを察して、姉上に向き合っている。イデオン宰相が欲しいと願うのは当たり前だ……」

「……駆け落ちの物語を、完成させてあげるべきでしょうか？」

ラハデ公爵の呟きに、私が小声でそう返すと、公爵は軽く目を瞠った。

「……あの少女も宰相殿と同じだけの熱量を持っているのなら、そうしてやるべきかも知れませんが」

さすがにあそこまで重くなくてもいい。そう思ったものの、彼女の優先順位の最上位はなんだと尋ねて、慌てふためいている程度には、思いはあるのだろう。

「レイナ嬢……私が王宮内の『転移扉』まで手引きさせていただきますわ」

——これでいいかしら、エドヴァルド？

第二章 替え玉のススメ

植物園を定時で上がってベクレル伯爵邸に戻ると、妙にソワソワとした伯爵夫妻に迎えられた。

「あ、ああ……すまないね。今日の午後、シーカサリ商業ギルドが雇う配達人が、レイナ嬢宛に

手紙が届いていると、邸宅を訪ねてきたのだよ。まさか勝手に開ける訳にもいかないだろう？ だから帰って来てくれるのを待ちわびていたというか……」

ああ、そうか。

伯爵夫妻的には、シャルリーヌからの返信が同封されていないか、気になって仕方がなかったんだ。

「分かりました、じゃあとりあえず先に開封してしまいますね」

商業ギルド製の手紙用の袋の中を覗き込むと、そこにはセルヴァンからの手紙と、シャルリーヌからの、私と伯爵夫妻それぞれ宛てた手紙とが計三通入っていた。

シャルリーヌからの手紙を手渡すと、それを押し戴くように受け取った伯爵が、何が書かれているかも含めて詳しくは夕食で……と言って、夫婦で私室へ下がつて行った。

私も、滞在させてもらっている客間に行き、二通の手紙に目を通す。

セルヴァンの手紙に関しては、皆、概ね変わりなく過ごしていることが書いてあった。

今のところアンジェスの王都では、ベルセリウス將軍の手を煩わせるほどの事件は起きておらず、ミカ君もイクスゴード洋菓子店の店子やボードリエ伯爵邸の人から学園の話聞くなど、着々と伝手を広げながら元気に過ごしているらしい。

それと同時に、王宮からエドヴァルドの帰国に関する連絡がまだ来ないため、私の安否も含めて皆がヤキモキしているとのことだった。

公爵邸家令としての権限では王宮がどうなっているのかを知るのは無理だろうから、さもあいな

ん、といったところだ。

むしろ続けて読んだシャルリーヌからの手紙の方が、ツッコミどころ満載で、どうしていいかわからなくなるくらいだった。

聖女が不在のため、少し魔力を融通してほしいとフィルバート国王の名で依頼があり、シャルリーヌは一度王宮に登城したらしい。

その際、エドヴァルドの不在中、急を要する決裁書類に関しては、フォルシアン公爵が臨時で補佐をしているらしいことや、そろそろフィルバートも待ち続けることにキリがないと思いついてるのか、私が進呈したギーレンからの刺客に関して「手首でもギーレンの王宮に送って催促しようか」などと素で呟いているとも書かれていた。

魔力の融通に來たご令嬢の前で何を言っているんだという感じだけれど、多分シャルリーヌはあんまり動いてないんだろなコレ……と、手紙を読みながら思う。

（というか、飽きてる！ 陛下ってば、もう「賭け」飽きてる!! 包みを開けたら人間の手足が軋がり落ちたとか……そんなの、まんま江戸川〇歩の世界の再現じゃない!! きっとシャーリーもドン引きよね!）

彼女も「蘇芳戦記」の元プレイヤーだ。フィルバート・アンジェスのサイコパスっぷりを分かっているから、一般的なご令嬢のように気絶したりはしないだろうけど。

むしろフォルシアン公爵と一緒に、素でツッコミを入れていそうな気がしないでもない。情報はありがたいけど、あのサイコパス国王に変に気に入られないといいなと思う。

これはもう、帰国に向けて動きを速めるより他はない。

もしくは、せめてエヴェリーナ妃とコニー夫人には「お二人は目にしないでしょうけど、手首が届いたらゴメンなさい」って連絡を入れておくべきなのだろうか。

私も夕食までしばらく真面目に悩んでしまったのだった。

そして、夕食の席ではというと。

ベクレル伯爵夫妻宛のシャルリーヌの手紙には「元気にしている」「ボードリエ伯爵夫妻にはよくしてもらっている」といった、出来る限り心配をかけないようにとの配慮に満ちた文章が並んでいたようだ。

まさか夕食の席で手首の話とかは言語道断だろうと、私の方は逆に乾いた笑いしか返せない。

せいぜい「アンジェスの陛下に請われて“転移扉”に魔力を融通したりはしているようですけど、他の公爵家や伯爵家への伝手も増えて、落ち着いて生活が出来るようになったみたいです」と答えるのが精一杯だ。

フォルシアン公爵やミカ君とそれなりに顔繋ぎが出来たみたいなので、嘘は言っていない。

それだけ権力中枢と近いということは、多分きつと言わなくてもいいことだ。

（親相手にネコ被ってどうするのよ、シャーリー……）

私の言葉に喜んでる夫妻を見るにつけ、とつてもいたたまれない。

ということ、一応一言言い添えておく。

「ただ、宰相閣下が帰国しないことに関して、陛下の我慢が限界に近付いているようだ、ありま